

第4学年 社会科の実践

1, 単元名 「健康なくらしとまちづくり」(全13時間)

2, 単元目標

- ・日常生活から出る廃棄物の処理方法等を調べることを通して、このような事業が計画的、協力的に進められているおかげで自分たちの健康で良好な生活が維持されていることに気づく。
- ・施設観察や、資料、ごみ処理に関わる人の話からごみ処理についての問題点に気づくことができ、地域の人々の願いや努力を感じ、自分たちにできることを考え、表現することができる。

3, 「ひびきあう三の丸の子どもたち」をめざすための指導の工夫

研究課題「切実な問題意識を持ち、友達とひびき合いながら学習する子どもの育成」

手立て…子どもの願いや思いを見とった単元構想と授業づくり

ブロックテーマ…追究する力、仲間と支え合う自分

- ・自分の問題をとことん追究する姿
- ・仲間と協働して追究する姿

【話す・聴く】

話を聴くことに対しては、教師として「相手の目を見て」「リアクションをとって」「話をしてくれたことに感謝の気持ちを持つ」を合い言葉に指導にあたった。教師としても、本学級の児童に願う話を聴く姿を実践し、規範を示すことに努力した。児童の言葉を共感的に聞いた上で、問い返したりした。また「なるほど」「すごいね」などの児童同士が共感する声も大切にした。

また「〇〇さんの言いたいことは、こういうこと」「つまり、〇〇だね」「例えば、こういうことかな」などの子ども同士の言葉の言い換えや、発言をより分かりやすくするためのつぶやきを大切に、高学年に向けてのひびき合いに向けて意識を高めた。

話をすることに対しては、教師として「全員に自分の声が聞こえるように」「みんなが聴いてくれているか確認する」「みんながいてくれて、静かに聴いてくれたから話ができたと感謝の気持ちを持つ」を合い言葉に指導にあたった。聴くこと同様、話をすることに対しても教師が規範を示すことをまず第一と考え、努力した。「聞いてください」と意図的に発言したり、「ここまでいいですか」など自然と説明を短く切る工夫を教師が率先して行うことにより、よりよい話の仕方を提示した。

安心して話ができる環境・相手の考えを聴くことで自分の考えが広がる環境こそが「楽しい・わかる学習」を生むことの1つだと気づかせるために、話す聴くの重要性を指導している。

また、9月に子どもたちが考えた「話す・聴く」も教室に掲示してある。話し方や、聴き方に問題があると考えた際は常にその掲示を見て振り返っている。同時に、よい話し方・よい聴き方ができている児童を積極的にほめ、クラスにその姿が浸透するようにした。

【関わり合い・ひびき合い】

各教科、特別活動の中で、ペアやグループになって活動し関わり合う場面を多く取り入れた。結果、自分の考えだけで考えていくより、みんなの考えを取り入れた方がよりよい考えが生まれることに気づき「周りと話し合ってもいいですか」と発言することも多くなった。その場合は、自分の考えをしっかりと持たせた上で、話し合いを行うようにしている。

学校で学ぶことの意味は「みんなで学ぶ」ことだと4月当初から児童に伝えている。まずは、自己の考えをもつ。自己の考えを持たないうちに、答えを要求してはならないとした。その後、相手の話に耳を傾け集中して理解し、相手と意見を比べたり修正しながら自分で考える。そして、自分の考えと理由をはっきりさせて発表し、話し合いをつなげて発展させていく。という学習の流れを常に大切に、ひびき合う学習の場を子どもたちと作ってきた。

4, 単元と指導について

① 単元について

本単元では、児童の身近にある「ごみ」についてが題材となっている。そのため、自分たちがごみを出していることやごみは分別することはなんとなく今までの生活経験の中で知っているであろう。しかし、「自分たちがどのくらいの量のごみをだしているか」「どんな種類のごみを出しているか」などと考えたことは逆に身近すぎるが故にないだろう。また、「なぜ分別しているのか」「誰がどのように収集・処理しているのか」「ごみは最後にはどうなるのか」などは、知らない児童が多いだろう。ましてや、小田原市のごみ出しルールなどは全く知らない。普段、何気なく見ている社会的事象に目を向け、自分の生活との関わりから、自分事としてごみ処理の問題を捉えさせていきたい。

ごみの減量化は小田原市における課題である。最終処分場がいっぱいになってしまい、自分たちの力では処分が難しくなっているのだ。そのため、小田原市では、他の地方に頼んでごみを処分してもらっているという現状がある。このような現状の中、小田原市では、平成9年から9つのごみ分別をはじめ、ごみ減量化に取り組み成果をあげている。さらなるごみ減量化を目指し、様々な取り組みが行われている。例えば、燃せるごみの減量に取り組んでいる。その活動として、紙ごみのリサイクル化と生ごみをリサイクル化があげられる。他にも、ペットボトル等のリサイクル化100パーセント等を目指し多くの人々が活動している。だが、なかなかその成果があがっていない。ごみステーションの現状は、分別が徹底されておらず、いろいろなごみが混ざった状態でごみが出されている。ペットボトルのリサイクルにおいては、異物が混入することが多いため、環境事業センターの方々が手作業で異物を取り除いているのだ。

このようなごみの実態を学習し、自分も小田原市民の一員であり、ごみ問題を自分事としてとらえ、解決への切実感や必要感を持たせ「循環型社会」について考えるきっかけとしていってほしい。そして、「自分たちができるごみ減量化」を考えることによって、社会参画意識を育てることができる単元であると考えている。

② 指導について

〈切実な問題について〉

ごみの学習を行うにあたり、まず児童の目線にたった導入として「自分たちクラスのごみの量」に注目する。自分が、学校で生活しているだけでこんな量のごみが出ているのだと実感をともなった理解を生む。その後、ごみの量の視点を家庭や小田原、全国と広げていくことによって「ごみの量がものすごく多い」ことに気づき「このままで大丈夫なのだろうか」という疑問を持たせていく。

この疑問を解決するために、ごみ処理について意欲的に活動していくことができる。そこでまずは、ごみステーションの見学に行く。すると、ごみの量はもちろん、ごみを処理する人の仕事の大変さや、分別が守られていない等の現状を知ることができる。このような知識も、体験を伴って見たり聞いたりすることができるので、さらに学習を深めていく。その後、自分たちでごみ処理の方法を調べた上で「小田原市環境政策課ごみ減量推進係石井さん」をゲストティーチャーとして学校にお招きし、環境事業センターの仕組みをDVDで学んだり、小田原のごみ処理の現状について詳しく話を伺ったりする。

そこで、「ごみを減らさないと将来大変なことになる」ことを痛感する。そこで、「ごみを減らすために自分たちができること」を考える。このごみを減らさなければならないことが児童にとって最も切実な問題となり、どうにかしたいと考えるだろう。

〈ひびき合いについて〉

小田原のごみの現状を知り、「自分たちもなんとかしなければならない」と考え「どんな活動ができるのか」を自ら考え、一人ひとりが考えをもった上でその考えを交流する場面でひびき合いが見られると考える。

考えの交流に至るまでの、学習してきたことを根拠に自分の考えを発表し、様々な考えを導き出し、本当に自分たちができることを見つけ実行していく活動にしたい。

単元
目標

- ・日常生活から出る廃棄物の処理方法を調べることを通して、このような事業が計画的、協力的に進められているおかげで自分たちの健康で良好な生活が維持されていることに気づく。
- ・施設観察や、資料、ごみ処理に関わる人の話からごみ処理についての問題点に気づくことができ、地域の人々の願いや努力を感じ、自分たちにできることを考え、表現することができる。

3 年生の総合的な学習
・リサイクル品を売って資金を貯めよう
3 年生の社会科「町たんけん」
・地域との関わり など…

4 年 2 組で出しているごみの量を調べてみよう！（オリエンテーション）

●どんな種類のごみが出ているかな。ごみ箱の中身

- ・消しやす ・ほこり ・ティッシュペーパーのごみ …
- ・食べ物⇒給食を残しているよね。

- ・クラスのごみ箱の中身を実際
- に確認する。
- ・9 月からのクラスのごみ箱の
- ごみや残飯量を写真で見る。
- ・7、8 月給食室ごみ集計報告の
- 資料を読む。
- ・「枝豆」を具体例に、食料品の
- 食べずに捨ててしまう部分に目
- を向ける。

すごい量なんだ。 学校全体だともっとすごそう。
家のごみも合わせたらもっとだよーね… ごみだらけだな。

活動計画、方法を考
え、見通しがもてるよ
うにする。

ネットの使い方、検索
方法等を押さえる。

グラフの読み取り、資
料の読み取り等で得
た情報は全員で共有
できるようにする。

いろいろなところのごみの量を調べよう！

●自分たちの家のごみは…家の人に協力してもらおうよ！

- ・分別があるみたい ・ごみの種類で出す日が決まってる
- ・燃せるごみが多かった ・ごみを出さないように工夫してるって言ってた

ご家庭にお便り配布
し協力をお願いする。

●小田原、神奈川、全国のごみは…資料やインターネットを使おうよ！

- ・平成 23 年全国のごみ 45385340 トン
- ・ごみを多く出している県 神奈川は 3 位（一人あたりのごみ排出量だと 31 位）

小田原市のごみの
量の変化の資料を
提示し、平成 9 年か
らごみは減ってき
ているが現在は横
ばいであることを
おさえる。

ごみだらけになってしまう。 燃せるごみの量が一番だったね。
地球はどうしてごみだらけにならないのかな…

ごみだらけにならないのはどうして。

●自分の住んでいる地域の周りのゴミステーションを調査しよう！

- ・分別を守ってない ・作業している人が大変そう ・くさい ・量が多い
- ・袋から水がたれていた ・すごく汚い ・ごみ袋の中身が重そう ・パッカー車がすごかった

保護者の方にボラン
ティアをお願いし、
分かれ調査をする。

●ゴミステーションにあったごみのゆくえを調査しよう！

- ・全 9 種類に分けられたごみはそれぞれ違う場所に運ばれ処理される
- ・リサイクルされるものもある ・燃せるごみは環境事業センターに運ばれる。

●もっと詳しくごみの処理方法を調査しよう！

- 小田原市環境政策課ごみ減量推進係 石井さん・和田さんから話を聞こう。
- ・燃せるごみの分別ができていない ・分別は燃せるごみを減らすためにやっている
- ・ごみを減らしていかないと処理ができなくなる ・段ボールコンポストという活動がある
- ・小田原のごみは東日本大震災で震災した地域に運ばれ処理されている

ゲストティーチャーとして石井さ
ん方をお招きし、パッカー車・環
境事業センターの仕組み、ごみ処
理の現状などを教えていただく。

このままの生活をしているとまずいんだ…
どうすればいいんだろう…。ごみを減らしていかなないと！

- ・「いろいろな立場の人の考えに
立って考えること」をおさえる。
- ・小田原市民として、ごみに対
しての意識や協力で、分別やご
みの減量化を進めることの大
切さをおさえる。

ごみを減らすために自分たちができることを考えよう。

●ごみを減らすための取り組みをクラス全員で考えよう。（本時）

- ・生ごみを減らせばいい ・使える物は最後まで使い切る ・紙を大切に
- する
- ・段ボールコンポストをやればいい ・家の人にゴミのことを教える
- ・ごみステーションに張り紙をする ・学校でごみを減らすよう呼びかける

今までの学習をもとに
根拠を持って話し合う
場面を設定する。

もっと多くの人に、ごみを減らす取り組みをしてもらいたいよ！

ごみを減らす大切さをみんなに教えよう！

●学校や地域に向けて、情報を発信したり、働きかけたりしよう！

- ・三の丸ホームページに情報を載せよう ・張り紙を作ろう 等
- ・石井さんたちと協力して、地域の人に情報を発信しよう

・子どもたちの提案
をまとめ、石井さん
に提示する。
・実際に活動できそ
うなものを行う時間
を確保する。

6, 本時について

- (1) 本時目標 ごみの減らし方を、比較・検討することを通し、「本当に自分ができるごみを減らす方法」を考えることができる。
- (2) 本時展開

主な学習活動	○主な支援・留意点			
ごみを減らす理由は… 埋め立て場がいっぱいになってしまうから。震災地に助けてもらっている小田原。 ごみを処理する仕事をしてくれている人の苦勞を減らしたいから。 ごみ処理をすることでの環境問題などをなくしたいから。 自分にできるごみを減らす方法を考えよう。 <table><tr><td> ★分別をしっかりする。 ○リサイクルができる。 ○無駄がなくなる。 ○燃やす物が少なくなる。 △9種類も分別がありめんどう。 △やりたいけど、難しい。 △今、やれていない…。 </td><td> ★段ボールコンポスト ○生ごみが減る。 ○土が再利用できる。 ○環境にいい。 △できない家庭がある。 △虫がわいてしまう。 △維持が大変。 </td><td> ★リフューズをする。 ○簡単にできる。 ○いろいろな方法がある。 ○「いらない」とかって言うだけでいい。 △忘れてしまうかも。 △みんながしないと効果がなさそう。 </td></tr></table> 自分は今日から、○○をしてごみを減らしていきます。理由は○○です。	★分別をしっかりする。 ○リサイクルができる。 ○無駄がなくなる。 ○燃やす物が少なくなる。 △9種類も分別がありめんどう。 △やりたいけど、難しい。 △今、やれていない…。	★段ボールコンポスト ○生ごみが減る。 ○土が再利用できる。 ○環境にいい。 △できない家庭がある。 △虫がわいてしまう。 △維持が大変。	★リフューズをする。 ○簡単にできる。 ○いろいろな方法がある。 ○「いらない」とかって言うだけでいい。 △忘れてしまうかも。 △みんながしないと効果がなさそう。	本時まで学習について大変意欲的に取り組んだことを称賛し、本時では、今までの学習を生かしながら判断することを伝え、学習への意欲をもたせる。 ○それぞれのごみの減らし方のメリット・デメリットに注目して話し合い活動が進められるようにする。デメリットが出にくい物があるので、児童から出なかった場合は教師から「いいところばかりかな」とゆさぶりをかけていく。 ○それぞれの方法の比較を容易にするために、「活動の効果」「活動のやりやすさ」「活動がいろいろな人にも行えるものか」などの視点をもてるように支援を行う。 ○次回の学習で、自分が考えた活動を行う具体的な手立てを考え実行することを伝える。 評価基準 【思考・判断・表現】 ◎それぞれの方法を比較・検討した上で、最後のまとめで自分の考えを理由をつけて表現することができる。(ノート・発言) ○自分の考えを表現することができる。(ノート・発言) △自分の考えをもつことができない。(ノート・発言) 支援 どの活動が自分にとって一番実現可能か一緒に考える時間を設ける。
★分別をしっかりする。 ○リサイクルができる。 ○無駄がなくなる。 ○燃やす物が少なくなる。 △9種類も分別がありめんどう。 △やりたいけど、難しい。 △今、やれていない…。	★段ボールコンポスト ○生ごみが減る。 ○土が再利用できる。 ○環境にいい。 △できない家庭がある。 △虫がわいてしまう。 △維持が大変。	★リフューズをする。 ○簡単にできる。 ○いろいろな方法がある。 ○「いらない」とかって言うだけでいい。 △忘れてしまうかも。 △みんながしないと効果がなさそう。		

7, 実践を終えて

本単元では、子どもの興味や関心がどこにあるのかを常に大切にしたいと考え、実践を行った。そのために、この単元では学習前にどの程度、知識や興味があるのか子どもの様子をみながら準備を行った。学習が始まってからも、毎時間子どもたちのノートをチェックし思考の流れをできる限り丁寧に見取することに努めた。同時に、45分間の授業の中でも、教師が座席表を持ち歩き机間指導を行いながら子どもたちの考えを書き込んだりして、その日の授業の流れを臨機応変に変える努力をした。

単元構想では単元の前半の活動を行うことによって「ごみを減らす手立てを考えなければ」と関心が高まると予想していたが、実際は早い段階から「ごみを減らす手立て」を子どもが自ら考えていることが発言や、ノートの記述からうかがえた。毎時間「自分がごみを減らしたい」「どうすれば小田原のごみが減るのだろう」「具体的には○○をする」と記述する子どもが多く、ごみ問題を強く自分事と捉え、社会参画意識を育てるよい場になったと考えている。

また、この単元ではご家庭の協力や地域の方々の協力のもと進めることができた。自分の家族、家族の知り合い、地域の方々、小田原市役所の方々から様々なお話を聞くことができた。その結果、単元を最後まで意欲的に進めることができた。「ごみを減らしたい」「きれいな町を作りたい」という様々な立場の人からの話を聞いたり、努力を目の当たりにしたりして、子どもたちにとってのごみ問題がより切実になっていった。

本時では、「本当に自分ができるごみを減らす方法」について話し合いを行った。前時では「ごみを減らす方法」を考えていた。その際、発問に主語がなかったため、自分が実践できることもあれば、できないこともあった。また、効果が強い方法もあれば、少ない方法もあった。ごみ問題に当事者意識を持つため、「それはあなたができること」と問い返した。「自分のできることはなんだろう」と振り返る時間を前時で設けた上で本時の活動を行った。その結果、「自分が本当にできる」という視点から話し合いができ、子どもにとって切実な課題になると考えていた。

しかし、前時で話題になった「効果が強い」という思考の印象が強かったこと、「5R」という知識の習得が先行してしまったこと、本時の課題を投げかける際に、教師から「考えてほしい」と発言してしまったこともあり、なんだか他人事のような意見が飛び交う結果となってしまった。子どもにとって切実な問題とはならなかった。「本を売る」「マイバックを使う」などの実体験から考えた方法が、前回の学習までに多く聞かれたのだが教師の発言の仕方ですら当事者意識が半減してしまったと考える。当事者意識を自然と持ちこれまでの経験や知識を生かして話し合う場にしていかなければならない。当事者意識を常に持てる教師の発問方法を事前に考えていきたい。

また本時では、自分にできるごみを減らす方法として、「分別をする」「コンポストを行う」「リフューズをする」の3つの視点から話合った。しかし、「分別をする」はやらなければならないことであり「面倒だからできない」「今、できていないからやれない」などの意見の交流は必要がなかった。やらなければならないことを事前に子どもたちの思考の中におさえて必要があったと反省している。教師の出所を見極めていく必要を感じた。

ただ、子どもたちは本時で「ごみを減らす方法」に対して自分の考えを持った上で、友達の意見を真剣に聞き「確かに」「なるほどね」などと声を出しながら共感したり、「ちょっと違う考えで」「それも分かるけど、私はこうの方がいい」どの自分の意見と比較し意見を述べていたりした。そして、リフューズについて話合っているとき、子どもたちの言葉だけで「ごみは減らして、再利用して、資源としてまた利用して…ってくるくる回ればごみは最小限出さなくてすむ」という循環型社会の考えを導き出していたことが大きな成果だと言える。子どもたちの「話す・聴く」の成長があり、ひびき合う姿が見られた。

今後、話し合いがさらに児童主体のものになるよう今後の課題として、話し合う必要性のある学習課題の設定、教師の出所の吟味をあげたい。児童を信じ、問題解決に向けてなんとか自分たちで解決しようとする主体的な学びを見守り、支えていきたい。そのために教材研究や児童理解に努め、教師の出所はどこなのか、必ずおさえなければならない部分はどこなのかをしっかりと把握する力を身につけていきたいと考える。